ハンナの祈り　　第一サムエル１章1～２８節

「ハンナの心は痛んでいた。彼女は激しく泣いて、主に祈った。」　第一サムエル 1:10

今から、約 3000 年以上も昔の出来事です。歴史的には、イスラエル民族が出エジプトの後、約 400 年間も続いた士師の時代の末期の頃の事です。その様な時代に、サムエルは誕生しました。

サムエルはユダヤ人の間では、モーセに次ぐ国家的指導者とされていました。あのモーセは、イスラエルをエジプトから解放し、律法を与え、約束の地のそばにまで導きましたが、

サムエルは、イスラエルが霊的に、政治的に、破滅にひんしていた時に、イスラエルに霊的革新をもたらし、新しい希望を与えました。又、サムエルは預言者、祭司として、イスラエルに仕え、士師としても、イスラエルを守った人でした。

――― サムエルの背後に、母ハンナの祈りが ―――

神様は、イスラエルを救うために、サムエルという人物を与えたのですが、その背後に、一人の母の祈りがあったことを、私たちは忘れてはなりません。その母とはハンナです。

さて、そのハンナの家庭をのぞいてみましょう。彼女の夫はエルカナと言います。エルカナは、この時代にあっては、まれに見る敬虔な人でした。

この当時、イスラエルの人々の信仰は堕落していて、宗教指導者も、一般の信徒も、神を恐れ礼拝を守って生きている様な人々は、ほとんどいませんでした。

その様な中でも、エルカナは「毎年自分の町から上って行き、シロで万軍の主を礼拝し、いけにえを捧げ」(3 節）ていたのでした。家族そろって、毎週礼拝を守っていたのです。この様に見て行きますと、何も申し分のない、夫の様に見えるかも知れません。しかし実は、そんな彼には、別の一面がありました。

確かにエルカナは善良な夫、思いやり深い夫、妻を愛してやまない夫でした。しかし、彼の信仰はというと、不動な確固たるものではありませんでした。実は、エルカナとハンナとの間には長いこと子供が出来ませんでした。きっと夫婦の間で祈りあったことでしょう。しかし、それでも子供は与えられませんでした。ついに、エルカナは主に祈る事をやめてしまいました。その結果どうなったでしょうか？　彼は別の方法、つまり人間的な方法で、この問題を解決しようとしました。なんと、別に奥さんをつくりました。あのアブラハムと妻サラの失敗と同じです。(サラは夫に、女奴隷ハガルとの間に子をもうける様にと勧めました。)

さて、エルカナのもう一人の奥さんはペニンナといいました。なんとこのペニンナとの間にはすぐ子供が出来ました。当然のごとく、問題が起こりました。

――― 苦しみの中で ―――

ハンナの地獄の様な生活が始まりました。ライバル意識を持ったペニンナはハンナをい

じめました。聖書には次の様に書かれています。
（6、7）「彼女に敵対するペニンナは、主がハンナの胎を閉じておられたことで、彼女をひどく苛立たせ、その怒りをかき立てた。そのようなことが、毎年行われ、ハンナが主の家に上って行くたびに、ペニンナは彼女の怒りをかき立てるのだった。こういうわけで、ハンナは泣いて、食事をしようともしなかった。」

ハンナの苦しみは、第 1 に、子供が与えられないと言う現実でした。
第 2 に、ペニンナの執拗ないじわるでした。
第 3 に、夫エルカナの裏切りでした。
しかも、その様な状態が何年も続いたのです。彼女はやせてしまい、悲しみの女性になってしまいました。エルカナの家庭は冷蔵庫の様に冷え切ってしまいました。
マルチン・ルターは言いました。「不幸な結婚ほど地獄に近いものはない。幸せな結婚ほど天国に近いものはない」　今、ハンナは地獄の様な苦しみを味わっているのです。
さて、その様な苦しみの中におかれているハンナでしたが、そんな彼女をじっと見つめてみますと、とても偉大な姿が、見えてきます。

――― ハンナの素晴らしさとは ―――

・第 1、彼女は、その様な苦しみの中にあっても、人を、神様を憎みませんでした。夫の裏切りに対しても、ペニンナからの迫害に対しても、更に神様の沈黙に対しても、うらみませんでした。聖書には、その様なうらみのことばは一言も出て来ません。

・第 2、彼女は、神様にのみ慰めを求めました。（10 節）「ハンナの心は痛んでいた。彼女は激しく泣いて、主に祈った。」　彼女はぶどう酒やお酒によって自分を慰めませんでした。うさをはらす様な遊びによって、又、人に当たることなどで自分を慰めませんでした。

・第 3、彼女は、心を注ぎだして、主に祈りました。　そのハンナの祈りですが、それは、明け渡しの祈り、献身の祈りでした。（11 節）「・・誓願を立てて言った。『万軍の主よ。もし、あなたがはしための苦しみをご覧になり、私を心に留め、このはしためを忘れず、男の子を下さるなら、私はその子を一生の間、主にお渡しします。そしてその子の頭にかみそりを当てません。』」彼女の祈りは、欲しいと願っていた子供を、与えられる前から主に献げてしまう祈りでした。

・第 4、彼女は、時を忘れて、主に祈りました。（12 節）「ハンナが主の前で長く祈っている間・・・」ハンナの祈りは、形式的、通りいっぺんの祈りではありません。もちろん祈りは長ければ良い、というものではありません。公の場所で長いのはむしろ腹が立ちます。でも密室の祈りは別です。時を忘れさせてくれます。

ある方が言いました。「祈りの時間を、惜しむ人は、人生を失い、祈る時に時を失う人は、人生を得るであろう。」今、ハンナは、時を忘れて祈っているのです。

――― かなえられたハンナの祈り ―――

さて、彼女の祈りが、どれ位続いたのか、わかりません。でも彼女は祈り続けました。
夫からも、祭司エリからも、助けてもらえなかったけれども、彼女は祈り続けました。
（第 1 ヨハネ 5:14）「何事でも神のみこころにしたがって願うなら、神は聞いてくださるということ、これこそ神に対して私たちが抱いている確信です。」
ハンナの祈りはかなえられました。どの様にかなえられたのでしょうか？

・第 1 に、悲しみから解放されました。
18 節に、そんな、ハンナの様子が描かれています。
「・・それから彼女は帰って食事をした。その顔は、もはや以前のようではなかった。」
食事ができるようになりました。ハンナの顔が全く変わっていました。神様の奇跡の業がすでに、彼女の内側で起こっていたのです。

・第 2 に、主は、彼女の祈りに応えられました。
（19、20）「・・主は彼女を心に留められた。年が改まって、ハンナは身ごもって男の子を生んだ。」　サムエルの誕生です。そしてこの子は、やがてイスラエルを救う、大きな働きをする器として成長して行くのです。実にサムエルはハンナの祈りによって、与えられた子供なのです。

――― 夫エルカナと、妻ハンナの祈りの違い ―――

それにしても何と大きな、エルカナとハンナの祈りの違いでしょうか。
エルカナは　①　祈ったのですが、祈ってもすぐに諦めてしまいました。
　　②　祈り続けないで、自己流の解決をしてしまいました。
神様はエルカナの様な中途半端な祈りでも、ある程度までは、その人の願いを聞かれます。
でもその様な祈りによって、エルカナとペニンナとの間で生まれた子供は、イスラエルの偉大なる、神様の計画とは何の関係もなかったのです。

――― 何故か？ ―――

それにしてもなぜ、神様はこんなにまでも長く、ハンナに祈らせたのでしょうか？
それは、イスラエルを救う神の器、この国に大きな神の御業を行うサムエルが与えられるためには、どうしてもこの様なハンナの祈りが必要だったのです。

（27、28）「『この子のことを、私は祈ったのです。主は私がお願いしたとおり、私の願いを

かなえてくださいました。それで私もまた、この子を主におゆだねいたします。この子は一生涯、主にゆだねられたものです』。こうして彼らはそこで主を礼拝した。」

ハンナは祈りがかなえられた後も、サムエルを献げ続けました。

この様にして、神様の祭壇に献げられたサムエルは、母ハンナの聖い信仰と愛の中で成長して行くのです。

実に、ハンナは信仰によって子を産み、信仰によって育てました。ハンナは信仰によって母になったのでした。この様な母によって、祈られている子供は幸せです。更に、大きな神様からの祝福を受けるのです。

――― 第2、第3のサムエルを！ ―――

さて、こんな言い方は大変失礼かとも、思いますが、どちらかと言うと、現在の教会はエルカナタイプのクリスチャンが多いのかも知れません。でもその様な時代の中にあって、神様は今、私たちにハンナの祈りを期待されておられます。

ある方が言いました。「教会とは、子供を産む所である」そうです。私たちから、教会学校から、光の子供が、そう、第2、第3のサムエルが誕生することを、主は望んでおられます。今、福音自由教会で奉仕しておられるある牧師先生には子供はおられません。でも子供が大好きな先生ご夫妻が以前の教会で奉仕されていた時、その CS にはなんと 153 人の子供たちが集められていました。先生ご夫妻は、本当に嬉しそうに「この生徒は、皆私たちの子供です。こんなにたくさんの子供達を主は与えて下さいました。」と言っておられました。

ハンナはサムエルを生みました。彼女は弱い一人の女性でした。いじわるされても、ただ泣いて祈るだけの無抵抗な女性でした。しかし、この弱い一人の女性、ハンナの祈りが、大きな神様の力を引き出しました。弱かったハンナですが、他の誰よりも、神様の力を、この地上に引き出しました。この時代、明日のイスラエルの勝利が、この一人の弱い女性、ハンナの信仰にかかっていました。

現代の日本の教会でも、特に婦人の祈りは教会を変え、家庭を変え、世界を変えるのです。

私たちの教会でも、一人一人が、このハンナの祈りを、神様を心から信じて祈る祈りを献げたいものです。その時、きっと第2、第3のサムエルが私たちの教会にも与えられるはずなのです。　第2、第3のサムエルを生み出すのは私たちの使命です。

(26～28)「ハンナは言った。『ああ、祭司様。・・私はかつて、ここで・主に祈った女です。この子のことを、私は祈ったのです。主は私がお願いしたとおり、私の願いをかなえてくださいました。それで私もまた、この子を主におゆだねいたします。この子は、一生涯、主にゆだねられたものです。』こうして彼らはそこで主を礼拝した。」